海部の地理（九）

―津久見市―（二）

津久見市の農業

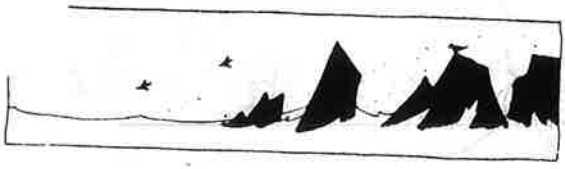
矢野彌生

（会員・佐伯市中山区）

表１　津久見市の農家と耕地（単位：戸、ha）

年度別	農家数				耕地面積			
	総数	専業	第1種兼業	第2種兼業	総数	水田	普通畑	樹園地
昭和50	1,465	256	352	857	1,043	1	25	1,017
55	1,352	280	251	821	1,042	1	16	1,025
60	1,201	293	162	746	985	1	23	961
平成1	1,113	297	112	704	911	1	29	881
2	811	236	95	480	909	1	26	882
3	799	236	93	470	909	1	28	880

（『津久見市統計書』による）



耕地の九六・八％は樹園地

津久見市の農業の現況についてみると、表１のとおりである。即ち、平成三年（一九九一）の耕地面積九〇九ヘクタールのうち、普通畑は二八ヘクタール、水田は一ヘクタールと僅少である。樹園地は八八〇ヘクタールと、全耕地面積の九六・八％を占めており、そのほとんどはミカン園である。

農家戸数は七九九戸で、専業農家二三六戸、兼業農家は、第一種兼業農家九三戸、第二種兼業農家四七〇戸で兼業農家が全体の七〇・五％と多い。

最近では農家戸数は減少傾向を示しているが、うち、専業農家は横ばい、停滞している。また、耕地面積は、昭和五〇年から平成三年まで減少している。耕地の減少は、平野部に分布する耕地が、宅地や鉱工業関連用地などに転用されてきたからである。

また、経営規模別農家数についてみると、平成三年では、総農家数七九九戸のうち、〇・五ヘクタール未満が

五五〇戸（六八・八％）と最も多く、〇・五から一・〇ヘクタールまでが一七六戸（二二・〇％）、一・〇から一・五ヘクタールまでが四八戸（六・〇％）、一・五から二・〇ヘクタールまでが一五戸（一・九％）、二・〇から三・〇ヘクタールまでが一〇戸（一・三％）となっており、零細経営であることが分かる。農家一戸当たり平均耕地面積をみても一・一ヘクタールにすぎない。

中世に栽培歴を持つ津久見ミカン

市のミカン栽培の面積を見ると、平成二年（一九九〇）の津久見温州ミカン四二二ヘクタール（全県の一二・四％）、夏ミカン一五〇ヘクタール（二〇・六％）、ネーブル四三ヘクタール（二・一・八％）、ハッサク一二ヘクタール（五・三％）、伊予カン四三ヘクタール（八・八％）、カボス一七ヘクタール（二・一％）その他の雑カン一七四ヘクタール（三〇・七％）で、新興産地に押されて相対的地位は低下している。しかし、現在でも大分ミカンの代表格として甘味が強く、その味の良さ、品質の点では銘柄が確立しており、価格の面でも優位を保っている。

この津久見ミカンは、中世のころから栽培されていた即ち、九州地方におけるミカン栽培史を文献や古木等より見ると、九州ミカン（小ミカン）が中世のころから津久見をはじめ、八代（熊本県）・柳川（福岡県）・桜島（鹿児島県）で栽培されていたとある。藩政時代に入り紀州有田は市場に恵まれ、全国的主産地に発展したが、中央市場から遠い九州では、津久見の青江、肥後の小天（おあま・玉名郡天水町）、河内（飽託郡河内町）・薩摩の長島（出水郡長島町）、桜島がミカン産地として地方的に知られる程度であった（1）。

ミカン栽培、明治末に本格化

上青江にある樹齢八〇〇余年といわれ、わが国に現存する柑橘類では最も古いといわれる「尾崎小ミカン先祖木」（国指定天然記念物）の古木の例でも分かるように、津久見ミカンの歴史は古い。『津久見柑橘史』（2）によると、「慶長五年（一六〇〇）美濃国より入封せし臼杵藩主稲葉貞通が同一五年冬朝廷へ蜜柑二千を献上して、女房奉書を下賜さる」とある。

また、『古史捷』（臼杵藩主稲葉家記録）によれば、

享保十一年（一七二六）十一月二十六日道尾庄屋作右衛門今度類火に遭い申候節、御用蜜柑取致候に付、穀物は焼失仕候、飯米無之由承知仕候、大麦拾俵御貸被成下様申上候処右之通被仰候事寛永二年（一六二五）三月十一日蔵富村御仕立蜜柑畑七歩九朱引高増の事、右畑地主に替地篠山被下候事宝歴八年（一七五八）九月十五日蔵富仕立蜜柑肥料・藁代銭・日雇銭の積りにて相渡様に被仰付候事

など、藩の直轄ミカンのことが記されている。

更に、『古史捷』によると、延宝八年（一六七九）には、道尾村（津久見市）と毛井村（大分市）で「蜜柑御仕立」ということで、それぞれ三斗一升余、五斗の土地が「高御引」となっている。これは、ミカンを仕立てていることで免税地となったものである。

毛井村のミカンは、享保十四年（一七二九）には停止になっているが、道尾村では後まで続けられている。

ミカンの生産は、当初は大分郡・臼杵・野津・三重などでも行われていたが、次第に津久見の道尾・蔵富・原の三村が中心となり、「道尾組三ヵ所御仕立みかん」とか「津久見御仕立みかん」と呼ばれるようになった（3）

いま、津久見市のミカンの栽培歴を見ると、表2のとおりである。文化元年（一八〇四）の栽培面積は一四ヘクタールである。栽培が本格化したのは明治末期からで特に明治四十一年（一九〇八）柑橘栽培拡張十カ年計画と、大正五年（一九一六）の佐伯までの日豊本線開通やイワシの豊漁による魚肥の多投などの好条件によって、栽培面積は急増している（4）。

明治三十七年（一九〇四）以降、海部の沿岸部一帯でも商品作物として桑に代わって栽培され、品種も小ミカンから温州に次第に転換していった。大正から昭和にか

尾崎小ミカン先祖木

けて、蚕糸ブームにのった桑畑や茶畑が拡大し、ミカン栽培は一時停滞したが、昭和十年（一九三五）から養蚕不況の影響で、桑畑からミカン畑への転換がみられた。第二次世界大戦中は食糧増産の波で大打撃を受けた。

ミカン農家、宮崎県へ出づくり

津久見ミカンの栽培も戦後は需要の増大で、ミカン園は拡大した。

しかし、開発の余地の少ない津久見市では、昭和三十八年（一九六三）ごろから新興産地の国東半島や宮崎県児湯（こゆ）郡都農（つの）町などへ新しい土地を求めて出づくり耕作をする農家も出現している（表3参照）。

津久見市を中心に大分県下のミカン出づぐり農家を調査した杉尾良也は『宮崎海岸平野の開発』（5）の中で次のように述べている。

戦後十年が経って日本経済も漸く混迷から脱して一応の安定を取り戻しはじめると、明治以来のミカンどころ愛媛県では愈々活況を呈しはじめた。そして昭和三十五年頃ともなると、二三男対策という意味も含めて大分県国東半島に上陸、ミカン出作りを始める農家が現われはじめる。これが刺激ともなって地元大分県の農民も続き、国東半島は新興ミカン産地として伸びをみせはじめるのである。丁度その頃ミカン農家は、貿易の自由化対策という難問との対決を迫られはじめる。国際競争の場に立たされた場合の最大の武器は低コスト

表2　津久見市のミカン栽培の系譜

年次	栽培面積	摘　　要	年次	栽培面積	摘　　要
文化元(1804)	14ha	嘉永元年(1848)早生温州が青江で発見される。	明治33(1900)	157ha	明治34年(1901)ごろから県外に移出される。
弘化元(1844)	35		明治41(1908)	162	
安政元(1854)	42		明治45(1912)	226	
明治元(1868)	54		大正7(1918)	500(推計)	昭和5年西ノ内に県柑橘試験地を設置。
明治17(1884)	91	明治27年(1894)甘夏橙が青江で発見される。	昭和4(1929)	596	昭和8年、津久見ミカン北米輸出2,276箱

（明治45年までの栽培面積は旧津組村の統計．『大分の園芸』〈昭和45年〉・『津久見柑橘史』〈昭和18年〉・『津組村地方改良事業柑橘等計画書』〈大正元年〉による）

高品質であるが、それをものにする為には、経営規模の拡大が先ず必須条件である。折しも国東地区がミカンの適地として伸びをみせはじめているとなると、津久見のミカン農家も安閑として居れなくなる。ここに胎動が生じたのである。昭和三十八年頃であった。

新しい土地を求めて或る者は国東地区から築城へと北上し、或る者は南下して宮崎県中部にまで足を伸ばしはじめたのである（この北上組と南下組は数において、ほぼ等しかったらしい）。

昭和三十九年は業者間で言う極東寒波に襲われ、各地の既設園が大きな被害を受けた年であったが、この自然の悪戯は進出組にとってみれば、寧ろ適地を物色する恰好の試薬であったという。

昭和三十九年にはしりがみられはじめて昭和四十三年までに、一六の法人や個人が進出してきていることがわかる（表3）。進出者が所有する樹園地面積は約七二ヘクタールで、昭和四十三年時点に於ける都農町の総樹園面積の二五パーセントに当る。既にして出作組は一つの勢力となったのである。

しかし、昭和四十年代後半から生産過剰気味となり、近年米とならんで減反の対象とされ、図1でも明らかなように、温州ミカンから甘夏柑やサンクィーン（昭和四十九年に導入）などへの樹種転換などが行われている。

表3　宮崎県都農町へ進出した人々

部落	氏名	面積	経営組織	進出年次	備考
牧内	川野一光	4.8 ha	個人	昭40	出作
〃	山本仙之助	3.0	法人（家族）	42	出作
〃	津農柑橘	13.0	法人（9人の共同）	39	出作
〃	共栄〃	4.5	〃（5人の共同）	39	〃
〃	中鶴	2.0	個人	40	〃
〃	宇津宮綱夫	1.5	〃	40	〃
〃	〃義男	1.5	〃	40	〃
〃	長谷部小太郎	1.5	〃	40	〃
〃	石井・秋田	3.0	法人（？）	40	〃
佃	日豊柑橘	11.0	〃（13人の共同）	39	〃
牧場	宗	？	個人	41	定住
〃	岩崎	3.0	〃	41	〃
〃	塩崎	3.3	〃	41	出作
竹浜	都農園	10.0	法人（家族）	40	定住
長野	三協柑橘	5.0	〃（2人の共同）	？	出作
		67.1	7法人		定住4．出作11

（都農町役場・農協の資料により作成・『宮崎平野の開発』より引用）

表４　津久見市の柑橘類の傾斜度別栽培面積（単位：ha、％）

区分		計	５度未満	５～15	15～25	25度以上
ミカン	栽培面積	577	15	100	379	83
	割合	100.0	2.6	17.4	65.7	14.3
甘なつみかん	栽培面積	190	4	42	125	19
	割合	100.0	2.0	22.0	66.0	10.0
ネーブル	栽培面積	35	1	6	23	5
	割合	100.0	2.5	17.5	65.0	15.0
いよかん	栽培面積	40	1	7	26	6
	割合	100.0	2.5	17.4	65.0	15.0
その他かんきつ類	栽培面積	188	4	33	124	27
	割合	100.0	2.1	17.4	66.0	14.6
計	栽培面積	1,030	25	188	177	140
	割合	100.0	2.4	18.3	65.7	13.6

『再編津久見みかん』（昭和57年）による

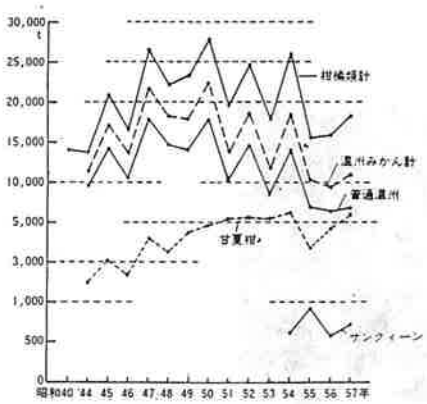


図１　柑橘生産の推移（『津久見市誌』による）

ミカン生産の自然条件　津久見市のミカン生産の自然的条件について考えてみると、県南地域はリアス式地形のため、平地が狭小で、広い樹園地に恵まれない。そのため、多くは急傾斜地に階段状に栽培されている。表４は津久見市のミカン園の傾斜度別栽培面積を示したものである。即ち、津久見市では、傾斜度一五度以上の急傾斜地に栽培されるものが、全栽培面積の七九・三％を占めており、ミカン樹の成長とともに作業が困難になっている。

従って、労力を多く要し、肉体的にも重労働となり、作業能率も悪く生産費のなかに占める労働費のウエートが、他の産地に比べて高い。

図2　津久見市のミカン分布
（『津久見みかん』昭和50年 九州農政局 大分統計情報事務所佐伯出張所による）

また、ミカンの栽培限界は海部地方では海岸線から四キロメートル以内となっており、津久見市の栽培高距限界は三〇〇メートルに達している(6)。しかし、古生層砂岩の風化した砂礫土壌で、排水もよく、年平均気温も一六度（摂氏）と温暖で、年降水量二一三三ミリメートル。土壌や気候条件に恵まれている。

段畑のミカン園

表5　柑橘類の生産量・生産額・キロ当たり生産者価格(単位：トン、万円、円)

区分	昭和62年	63	平成元年	2	3
早生温州	4,290	2,840	2,470	1,840	1,803
普通温州	7,560	4,100	4,900	3,420	2,438
甘夏柑	6,150	4,300	3,400	2,070	1,853
サンクィーン	1,260	1,070	1,000	1,480	1,003
その他	3,200	2,590	1,980	2,135	1,406
計	22,460	14,900	13,750	10,945	8,503
生産額	120,000	91,000	119,065	132,106	148,462
キロ当り生産者価格	63.0	61.1	86.6	120.7	174.6

(『津久見市統計書』平成3年版による)

津久見ミカンの課題

津久見ミカンは、栽培歴が古いことから古木が多く、更新が必要であること。同じ温州でも系統が幾つもあるので統一し、品質を高めること。サンクィーンのほかに新品種を開発して、売れる、うまいミカンづくりにもっと取り組む必要があること。近年は京浜市場が五〇から六〇%で、関西・中国・甲信越がこれに次ぐが、新たな市場開拓が望まれるなど、津久見ミカンの課題は多い。

更に、九州南部の気象的立地条件を生かし、早熟化とともに、うまいミカンへの品質向上、高品質のミカンを安定生産し、生鮮な健康食品を消費者に提供すれば、需要はまだ伸びるのではないかと指摘されている。また、消費者の間からは「完熟したミカンを、落下式選果機を通さず、ワックス処理を施さないうまいミカンを食べたい」という声も聞かれる(7)。また、最近の津久見市のミカンの生産の状況を示したものが表5である。津久見市では、ミカンの生産額・生産価格は増加しているが生産量は減産の傾向を示していることが分かる。生産量の著しい減少は、昭和六十二年から平成三年の五年間に樹園地面積が四四ヘクタール減少していることが影響し

ていると考えられる。

津久見湾の漁業

内海型の沿岸漁業

豊後水道西岸のほぼ中央部に位置する津久見湾岸一帯は、リアス式海岸で岬や入江も多く、天然の良港湾に恵まれ、保戸島や無垢島付近は魚類繁殖に適した岩礁も多く、古くから沿岸漁業が盛んであった。津久見市の漁業は、豊後水道近海を主な漁場とした内海型の沿岸漁業である。

平成二年（一九九〇）における漁業の現況を見ると、漁業の経営体数五八二（昭和六十年七五七経営体）。漁獲量二万四二四トン（昭和六十年二万五四五二トン）で保戸島のマグロはえ縄と津久見のまき網の漁獲の多いことが目立つ。即ち、漁業種類別漁獲量の割合では、マグロはえ縄七六・八％と圧倒的に多く、まき網一七・七％一本釣り二・八％となっている。

また、漁船数についてみると、無動力船三隻、動力船六九六隻で、そのうち一トン未満八〇隻（全体の一一・五％）、一から三トンまで三八七隻（五五・六％）、三から五トンまで九二隻（一三・二％）となっており、沿岸漁業の零細性を示している。五から一〇トンまで一七隻（二・四％）、一〇から二〇トンまで四四隻（六・三％）、三〇から五〇トンまで五隻（〇・七％）、五〇から一〇〇トンまで五九隻（八・五％）、一〇〇から二〇〇トンまで一二隻（一・七％）となっているが、そのほとんどは保戸島マグロはえ縄漁船である。

津久見市の漁業では漁獲は少ないが、小型底びき・刺網・一本釣・小型定置網・船びきなど零細漁業が多くの沿岸漁民の生活を支えている。特に、保戸島や無垢島近海では、タイ・イサキ・アジ・イワシ・ブリなどの回遊性魚族が多く、釣り漁業も盛んである。また、無垢島周辺は、保戸島・佐賀関・臼杵の漁民の入会漁場になっており、乱獲のため、漁獲が減少している。このため、地無垢島の漁民からは、「入会漁場」をなくし、地元が漁業権を獲得することが強く望まれている。

津久見湾内では、リアス式地形を利用し、真珠やブリ・ワカメなどの水産養殖が営まれている。真珠養殖は楠屋・刀自ケ浦（とじがうち）・日代（ひじろ）。ブリ養殖は伊崎・鳩浦・江ノ浦で営まれているが、愛媛県など

の他県業者によるものが多い。

全国にさきがけて始めた大分県の資源管理型漁場の造成事業は、昭和四十八年度から七年間、米水津湾で行った実験をもとに、五十三年度から津久見湾でも実施しており、日代地先ではマダイの中間育成施設（海上小割網生）を設けてマダイ種苗を飼育し、自然海へ放流している。そのため、津久見湾内でのタイの漁獲は増加している。

また、昭和六十二年十二月には大分県が開発した音響給餌による実用型海洋牧場のロボットが津久見湾保戸島沖に設置され、マダイの稚魚五万匹が放流された（佐伯湾に完成した鶴見町の元ノ間海洋牧場に次ぐ2号、保戸島漁協が管理運営）。

海洋牧場

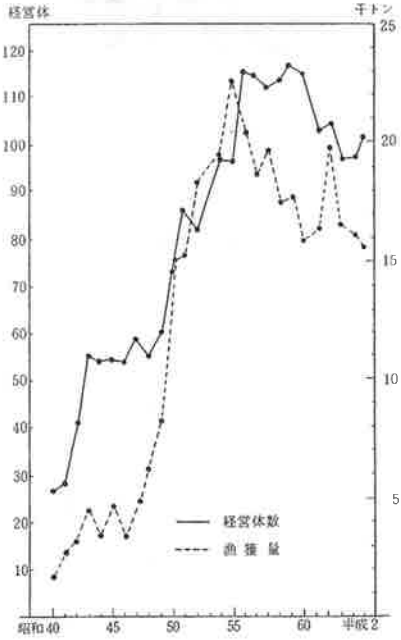
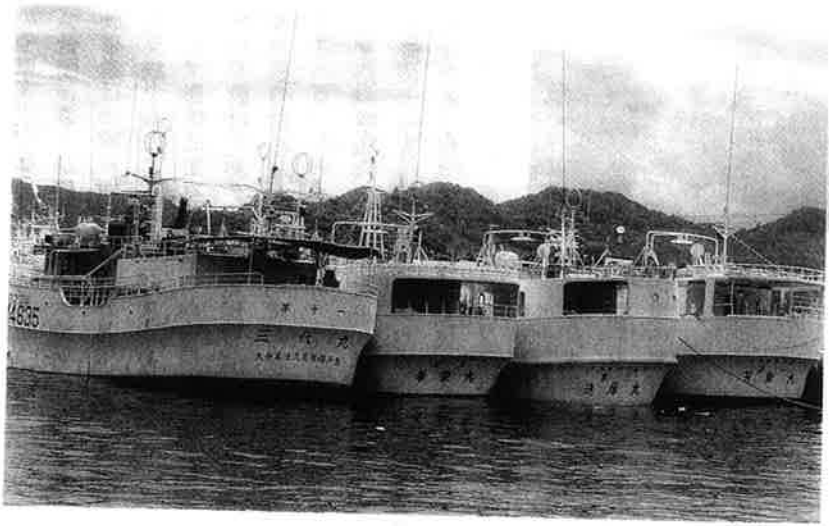


図3　保戸島のマグロはえ縄漁業の経営体数と漁獲量の推移
『大分農林水産統計年報』による
（昭和40～49年の漁獲量は太平洋南区の合計値）

保戸島のマグロはえ縄漁業

マグロはえ縄漁業は、昭和二十七年（一九五二）の講和発行に伴う操業制限の撤廃や遠洋化政策等によって漁場を外延的に拡大しながら急激に発展し、昭和三十五年まで日本漁業発展の担い手となった。しかし、その後は未開発漁場の消滅に伴う資源の悪化や外国マグロ漁業の発展による市場競争の激化、その他によって衰退を余儀なくされ、漁獲量は、昭和三十七年の五三・七万ト



保戸島のマグロはえ縄船団

ンをピークに、昭和四十五年ごろ三〇万トン前後に激減し、以後、ほぼ横這いを続けている。それに対し、大分・宮崎・鹿児島の三県のマグロ延縄漁業はかえって発展した（8）。

保戸島のマグロはえ縄漁業は、平成二年では経営体数一〇〇で、二〇トン以上の許可船と二〇トン未満の漁船からなっている。いま、保戸島のマグロはえ縄漁業の経営体数と漁獲量の推移を見ると図3のとおりである。

昭和五十年代に入ってから急激に漁獲量・経営体数とも増加していることが分かる。これは、昭和四十年代から五十年代にかけて、国や県の指導もあったからで、遠洋漁船が急激に増加し、五十四年には一三五隻、年間水揚げ高も百億円を超えた。一隻当たりの年間粗収入は五、六千万円ともいう。平成二年には一万五六九〇トンを水揚げし、売り上げは一三〇億円を超えている。

保戸島のマグロはえ縄漁業は古い歴史と伝統を持ち、漁労技術も優秀である。明治三十九年（一九〇六）に高知県清松村清水（土佐清水市）で、ネブト漁があると聞いて出漁し、トンボ鮪（シビ）やメバチ鮪などがよく釣れたので、トンボ縄を導入した。このトンボ縄が保戸島

のマグロはえ縄の始まりという（9）。

明治末期における漁船の動力化、大型化とともに沖合漁業は飛躍的に発達した。保戸島では遅れて動力化が始まり、大正七年（一九一八）一五馬力焼玉機船（八トンぐらい）が初めて進水し、小笠原・北海道などの漁場へ出漁するようになった。大正九年には機械船二一隻、大正十二年二七隻と増加した。昭和八年（一九三三）最盛期には船体も大型化し、四〇トン級で八〇隻、従業員千人を超える盛況であった。即ち、保戸島は大正後期から昭和初期にかけては、全国有数のマグロ漁業基地であった。

第二次世界大戦で、全船徴用され、わずか三隻（それも終戦後廃船化）を残して沈没し、壊滅した（10）。昭和二十五年漁業権の保証金六百七十万円を基に組合自営船四隻を建造したことが遠洋漁業再建の契機となり、一九から六九トン程度の中規模船で装備も近代化された。

操業海域は、北緯一〇度以北の太平洋海域（カロリン諸島や小笠原諸島・南シナ海）で、漁獲の中心はキハダマグロである。年間七、八航海を実施する。船籍は保戸島にあるが、主な水揚港は勝浦（和歌山県）・油津（宮崎県）・鹿児島・高知・広島・大阪・清水（静岡県）・銚子（千葉県）・釜石（岩手県）・八戸（青森県）などで、最近では勝浦での水揚げが最も多い（11）。

全国的な衰退化の中で、保戸島や串木野（鹿児島県）のマグロはえ縄漁業が大きく発展した要因は複雑である両者に共通していることは、明治期の遠隔出漁を端緒に発達した古い伝統を持つマグロ漁業地であることや、農業を全く欠き、他に有力な産業が皆無なこと。それだけにマグロはえ縄にかける意気込みは特別であり、伝統的に優れた「　（はら）と腕」の船員労働力が豊かであったことなどである（12）。

しかし、最近では、保戸島のマグロはえ縄漁業も地元船員の不足が目立ち、宮崎（都農町出身者が多い）・鹿児島から補充していることや、燃料代を中心とする経費の高騰、漁場の国際制約や入漁料・水揚げ港が県内にないこと、船員の賃金が歩合制（総水揚額から市場手数料必要経費を差し引き、残りを船主五五％、船員四五％の割合で分ける）で不安なことなど、困難な問題が少なくない。

註

(1) 『日本地誌』第19巻九州地方総論・福岡県（二宮書店　昭和四十九年）

(2) 『津久見柑橘史』（津久見柑橘史刊行会　昭和十八年）

(3) 豊田寛三「近世臼杵の町と村」（『臼杵市史』上巻　臼杵市　平成二年）

(4) 兼子俊一『大分県の地理』（光文館　昭和三十七年）

(5) 杉尾良也『宮崎海岸平野の開発』（九州高等学校地理教育研究会第一回大分大会発表資料　昭和五十四年）

(6) 矢野彌生「海部地域」（『大分の歴史』第10巻大分合同新聞社　昭和五十四年）

(7) 矢野彌生「古い栽培歴をもつ津久見ミカン」（『大分県史』地誌篇　大分県　平成元年）

(8) 土井仙吉「以西漁業の変遷」（『九州地方』新日本地誌ゼミナール7　大明堂　昭和六十年）

(9) 『津久見市誌』（津久見市　昭和六十年）

(10) 丹羽真知子「保戸島の遠洋漁業」（『大分県地理』12集　大分県地理学会　昭和三十七年）

(11) 矢野彌生「津久見湾の漁業」（『大分県史』地誌篇　大分県　平成元年）

(12) (8)に同じ

表紙解説

『庚申塔鶏図』

柏江の速川神社下の道路端に宝暦五年に建てられた立派な庚申塔がある。お為半蔵の心中事件が起こって六年目、お為の父龍正院の名が見える。庚申塔には人の延命招福が祈願される。日本では鶏は古代から家禽として鳥の中でも最も親しまれてきた。吉凶を占い、時を知らせ、一番鶏が鳴いて鬼を退散させるなどの話がある。西年にちなんで……。

さとう　たくみ